

まちの話題

世界で通用する映画を作りたい

近藤有希さん (47歳)



まちの話題

2月6日、町民会館ホールで映画「あん」の上映会が行われました。この作品は樹木希林、永瀬正敏らが出演し、国内の数々の映画祭で賞を受賞しました。また、カンヌ国際映画祭「ある視点」部門のオーブニング作品に選ばれるなど、海外でも高い評価を受けています。

今回は、この映画の助監督を務めた、東郷町祐福寺地区出身の近藤有希さんに話を聞いてきました。

中1の時から映画一筋

近藤さんが映画製作の世界に飛び込むことを決めたのは中学1年生の時。ジョーシ・ミラー監督の「マッドマックス2」というアクション映画を見たのがきっかけでした。

「映画を見て衝撃を受けました。言葉で表すのは難しいんですが、世界観が素晴らしいです。他の映画にはない魅力を感じました。あのときに『絶対に映画監督になる』と決意したんです」と話します。

「あの90分ほど、全てのことを忘れて映画に集中したことはありません。今後未経験することはないと思います」「マッドマックス2」を見

てからは、映画の世界にまっしぐら。毎週末、学校の友達を誘い、自転車で片道1時間以上かけて映画館に通いました。多いときには、1年間で100本ほど映画を見たといいます。

一歩ずつ前へ進む

近藤さんは、高校まで東郷町で過ごし、高校卒業と同時に上京。神奈川県の日本映画学校で映画製作を学びました。現在は助監督を務めています。

助監督には一般的に、チーフ、セカンド、サードなどの序列があります。チーフの仕事は、撮影スケジュールを組み、撮影のタイミングを決めること。役者の状態や撮影場所の天候などを見て、カメラを回すタイミングを指示します。例えるならオーケストラの指揮者のような役割です。そしてセカンドは衣装と化粧、サードは美術を担当します。近藤さんは「あん」でチーフを担いました。

「監督ではなく助監督。まだまだです。焦りを感じます」

しかし、助監督を経験せずに監督になる人もいます。「どの国の人に見せても恥ずかしくない作品を作るため、助監督の仕事からしっかり学ぶことにしたんです」と、プロ意識を高く持っています。仕事がない日でも映画を見たりシナリオ

を書いたりするなど、日々の研究は欠かせません。

世界中の人に見てもらおう作品を作る

近藤さんに今後の目標を尋ねると「異なる言語を話す人が、自分と同じ場面で笑ったり泣いたりしているのを見るとみんな同じ人間なんだな」と喜びを感じます。監督になって、そういう作品を作りたいんです」と教えてくれました。

そのためには表現方法を追及する必要があるそうで「『あん』の河瀬直美監督からも撮影現場でいろいろと学びました。彼女は臨場感あふれる映画を作るんですよ」と語ります。

「あん」を見てくれる人へ

「これから『あん』を見てくれるなら、ぜひ前知識を入れずに見てください。その方が楽しんでいただけたと思います」

世界中の人に見てもらえる映画作りを目指す近藤さん。監督として有名になる日も近いかもしれません。皆さんも近藤さんの作品を見てみませんか。

